

うじいえ

編集・発行

うじいえ自然に親しむ会

事務局

さくら市ミュージアム

- 荒井寛方記念館 - 内

自然に親しむ会だより

第9号

平成19年12月14日

ごあいさつ

会長 加藤 啓三

今年は、うじいえ自然に親しむ会が発足して5年目、さくら市の天然記念物に指定されているシルビアシジミが発見されて130年の節目の年に当たります。

さくら市ミュージアムでは「大いなる鬼怒川」という企画展が開催され、各種の行事に協力することが出来ました。

鬼怒川河川敷の自然環境保全活動も会員の皆様方の献身的な協力により着々と進んでいるところです。

2年間続いたさくら市からの助成金は打ち切りとなり運営面ではかなり苦しくなり、会報も年2回発行を1回に減らしました。こうした折、ロータリークラブ（長島久登会長）より助成金が受けられることになりました。関係者各位に厚く感謝いたします。

また、本会のPRについては2月の小田原市「生命の館」での「鬼怒川のシルビアシジミ」の発表にはじまり、「昆虫と自然」5月号（ニューサイエンス社）の「栃木県鬼怒川流域におけるシルビアシジミの保全」や「チョウ類保全ニュース」7月号（日本チョウ類保全協会）の「団体活動レポート」に本会の活動を取り上げていただき、うじいえ自然に親しむ会の活動が、全国へ発信されました。

さらに、本会のホームページでは、新着情報として、その活動を報告しています。

今後とも、会員の皆様方のご協力よろしくお願いいたします。

平成19年の活動	
4月 7日	草川の清掃(さくら市勝山)
4月14日	ギフチョウの観察会(神奈川県相模原市 ※旧藤野町)
4月28日	ヤマブキソウ観察会(お丸山公園)
5月19日	栃木県植樹祭の一環で鬼怒川植物観察会(ゆうゆうパーク)
6月 3日	鬼怒川河川敷植物観察会(ゆうゆうパーク)
	第5回 定期総会(さくら市ミュージアム)
	講演会「鬼怒川河川敷に自生する植物の保全」 村中孝司 氏
6月14日	塩谷地区中学校理科部会研修会(ゆうゆうパーク)
6月18日	オオキンケイギク抜取作業(ゆうゆうパーク)
6月30日	ホタル観察会(ゆうゆうパーク)
7月 1日	ゆうゆうパーク小川の清掃
7月19日～ 9月 9日	さくら市ミュージアム企画展「大いなる鬼怒川」への協力
8月28日	皆既月食観察会(押上小学校)
9月 8日	写真講座(ネイチャーフォト)(さくら市ミュージアム)
9月26日	公民館より依頼の自然観察会(ゆうゆうパーク)
10月 4日	牛久自然観察の森視察(茨城県牛久市)
10月14日	シナダレスズメガヤ抜取作業・カワラノギク観察会及びいも煮会 (鬼怒川河川敷・さくら市ミュージアム民家広場)
10月27日～ 10月28日	ゆめ・さくら博に出展(さくら市氏家体育館)
11月18日	鬼怒川河川敷のゴミ拾いとシナダレスズメガヤ抜取作業 (鬼怒川河川敷)
11月25日	国蝶・オオムラサキ幼虫の越冬準備 (さくら市ミュージアム)



4月28日開催
お丸山公園ヤマブキソウ観察会



5月19日
「栃木県植樹祭」緑化功労者(会長賞)表彰

企画展「大いなる鬼怒川」展への協力

副会長 田代 英夫

平成19年7月19日～9月9日にかけて、さくら市ミュージアム―荒井寛方記念館―において「大いなる鬼怒川」展が開催されました。

この特別企画展は、明治10年に英国人外国語教師フエンソンがさくら市上阿久津の河原で、世界で最初にシルビアシジミなるシジミ蝶を発見してから今年が130年という区切りの年に当たることと、国が鬼怒川改修に着手して80年の節目を迎えることとを合わせて開催されました。

そこで、さくら市ミュージアム（以下、ミュージアムと略します）に事務局を置く「うじいえ自然に親しむ会」としても、何らかの協力をしなくてはということになりました。

以下、その協力の経緯や様子について述べてみます。

この企画展の内容をどのようなものにするかという重要な問題を話し合う準備委員会みたいなものが、小竹弘則学芸員を主軸に数回持たれました。小竹氏の以外のメンバーは、宇都宮大学名誉教授の中村和夫先生、国土交通省氏家出張所長の宇梶実氏、それに私たちの会からは、加藤啓三会長、松田喬副会長、田代英夫副会長（私）の3名、合わせて5名でした。

数回の話し合いを通して、企画展の骨組みが決まってゆきました。

企画展を開催するに当たり、折角の機会ということで後に残るような冊子を出すことになりました。私たち3名も、執筆の一翼を担うことになりました。

加藤会長と田代副会長（私）の二人は、「うじいえ自然に親しむ会の活動」というタイトルの下に執筆を分担しました。松田副会長は「鬼怒川礫質河原の昆虫たち～その特徴と生態～」のタイトルで、自ら撮影した昆虫の写真を、分かりやすい解説付きでふんだんに載せました。企画展の案内パンフレットに使われた写真は、松田副会長のプロ級の腕前の賜物です。見る人を楽しくさせる出来栄えと自負しています。

拓本どりのことも忘れられません。鬼怒川の歴史を語る上で、忘れてはならない大きな出来事を記念して建てられた大きな石碑の拓本どりのことなのです。

昭和24年8月31日に日本を襲ったキティ台風により、氏家町（現さくら市）大中地区の鬼怒川堤防が数百mにわたって決壊し、大中地区は未曾有の災害を被りました。それまで、県の管轄だったものを国の管轄とし、急ピッチの大修理がなされ現在の強固な堤防が完成したのです。そのことを後世に伝える記念碑の拓本どりのことなのです。発案者は私たちの会の役員の一員である佐藤裕氏です。その拓本は原寸大で展示会場に飾られました。

企画展開催前の準備段階で、河原から砂利を運ぶとか、本物のミヤコグサを展示場に飾るといった作業にも、加藤会長を中心に、会員は多少なりとも協力できたと思っています。

この「大いなる鬼怒川」展には、単に展示だけでなく、講座、体験学習、見学会など、盛り沢山の行事が組み込まれました。

余談になりますが、特別展の期間中に、相模原市に住んでいる小学校5年になる孫が私たちの家に来ていました。これ幸いと、孫ともども体験学習や見学会に参加しました。個人では絶対に見ることのできない、五十里ダムや川治ダムの内部を見せてもらいました。貴重な体験をさせていただき感謝しています。

シルビアシジミ監視活動をふりかえって

理事 佐藤 裕

6月9日から土曜・日曜日を中心に行われた今シーズンの監視活動が10月14日をもって終了した。今年は監視活動に参加する会員も16人と大幅にふえた。いつまでも終わらない夏、異常気象がささやかれた中での今年の活動をふりかえってみた。

5月はじめ、シルビアシジミが盛んに飛び交っているとの情報をうけて 私たちは大きなよろこびと手応えを感じた。

さて、パトロールを始めた頃、捕虫網を持った不審者の姿はほとんど見かけなかった。シルビアシジミ保護を訴えて設置した看板のアナウンス効果は絶大かに思えた。前年の私の経験からすると、梅雨明け後、蝶をはじめとする昆虫が、活発に動きまわる7月、8月はこの地の鬼怒川をめざして関東各地から採集のために昆虫愛好家がやってくる。

私も、少なからぬ憂鬱と緊張をもってパトロールにでかけた。

ところが、6月なかば以降の鬼怒川は 数年ぶりに大にぎわい。適度な降雨と照りこみに恵まれアユを追う釣り人が絶えない。昆虫愛好家の姿はついで見かけることはなかった。今年はこのまま行くか…と思われた頃、たて続けに蝶の愛好家があらわれはじめた。私のメモをみってみる。

8月24日午後4時ごろ、氏家大橋から80mほど下ったニセアカシアの林のところで緑色の捕虫網をもった男女を発見、私が近づくと捕虫網をすばやく手放した。

車は野田ナンバー。9月28日、国交省出張所南で、これまた野田ナンバーの男性2人、ツマグロキチョウを捕っているとのこと。10月7日、国交省出張所前の河川敷で茨城と神戸ナンバーの車、男性3人、シルビアは採っていない、ツマグロキチョウだとのこと。10月14日、同じ所で京都ナンバーの男性、これもツマグロキチョウという。

いずれも 会のパンフレット、ホームページアドレスカードを渡して協力をお願いした。一方 他のパトロールメンバーによれば9月に これより上流でシルビアシジミを採っている人を発見、説得するも拒否されたという。

また、5月にさかのぼるが東京大学大学院保全生態学研究室の須田真一先生がマーキングしておいたシルビアシジミの卵がミヤコグサごと持ち去られるという事例も起きていたという。こうしたことから分るようにさくら市鬼怒川の河川敷はシルビアシジミをはじめとする珍しい蝶の棲息地、繁殖地として多くの蝶愛好家に知れわたっていると思われる。

でも、悪いことばかりではない。10月17日には、シルビアシジミがお目当てという3人の家族連れに出会った。捕虫網のかわりに手にしていたのはカメラ。

思わず「皆さんのような方は大歓迎です」と会のパンフレットを渡した。3日後、再び出会ったら「会に入りましたよ」とのこと。うれしかったですね。

環境保護に対する人々の関心は年々高まっています。市の天然記念物に指定されているシルビアシジミの捕獲禁止は当然の措置ですし、まして、その卵を食草ごと持ち去るなど許されることではありません。さらに言えば、ツマグロキチョウといいながら実はスウィーピングしていた網のなかには、本命のシルビアシジミが入っているのではないか…。疑い出したらきりがありません。その一方で、私はこうも考えます。

一部専門家は別にして、動植物に知的関心をもつ一般の愛好家を全く締め出してしまうの

は、はたして正しいのだろうかとも。

私たち親しむ会は、つぎなる一步をどう踏み出したらよいのでしょうか。さくら市鬼怒川の自然に深くかかわっている東京大学大学院保全生態学研究室の須田真一先生は研究の一端としてシルビアシジミの繁殖状況を数値化すべく調査にあたられています。また、来年 春にはその結果を発表されるときいています。

ある範囲内にシルビアシジミはどのくらいいるのだろうか。卵の数はどのくらいなのだろう。増えつつあるのか、横ばいなのか、少しくらいの採取は影響しないのか。

まだまだ わからないことばかりです。

この研究はシルビアシジミの保護とその繁殖環境をサポートしたいという私たちの活動に科学的な裏づけを与えてくれるものと思います。その調査の結果によって私たちの次なる一步が見えてくるのではないのでしょうか。



「大いなる鬼怒川」展 入口の大看板



刊行された企画展示図録 (表紙)



「大いなる鬼怒川」展 会場①
(大中堤防 完成記念碑拓本と漁撈具の展示)



展示会場②
(鬼怒川河川敷の礫河原の再現展示)

写真講座 ネイチャーフォト入門

副会長 松田 喬

散歩の途中でも感動の場面に出会ったり、思わぬ発見をすることがあります。そんなとき携帯電話に内蔵されたカメラも大いに役立ちますが、もっとよい画質で撮りたい、望遠があればなどと、不満に思うことも多いはずです。最近のデジタルカメラはコンパクトで高性能になりました。こうしたデジカメを使えばかなり満足できる写真を撮ることが出来ます。最初から高価な一眼レフデジカメを購入するより、持っているデジカメを使いこなすほうが良いと思います。それが使いこなせるようになってから、自分の目的にあった機材を購入する方がよいと思います。

ネイチャーフォトの対象は、花鳥風月に限らず、自然界の森羅万象すべてですが、撮影しているうちにそれぞれの好みによって対象が決まってくるものです。コンパクトなデジタルカメラだけでも、色々な撮り方に挑戦したり、ちょっとした小物を工夫すると他の人と違った写真が撮れます。デジカメは撮影結果がすぐ確認でき、気に入らないものは削除できるので、いろいろ試し撮りしておくとい良いでしょう。

コンパクトデジタルカメラによる撮影

最近のコンパクトデジタルカメラ（コンデジ）は、機能が多いのですべてを使いこなすのはたいへんですが、だからといっていつもプログラムオート（P）では、宝の持ち腐れです。

多くのコンデジでは、色々な撮影モード（シーンモード）をメニューから選ぶことができます（今では高級な一眼デジカメでも撮影モードのついているものが多い）。どんなモードがあるかマニュアルと首っ引きで確認しておくことをまずおすすめします。特にマクロ（接写）モードは使う機会が多いと思います。メーカーによってデザインに違いはありますが、普通チューリップマークになっています。ただコンデジのマクロ撮影は、昆虫など動くものを撮影するのは苦手です。また、背景をぼかして被写体だけを浮かび上がらせるのは難しいかもしれません。しかし、近いものはより大きく、遠いものはより小さくと遠近が誇張されて写ることや被写界深度（ピントの合う範囲）が大きいことを利用すると独特の表現ができます。それには被写体に思い切って近づくことです。画面に被写体が大きく写し込まれ、その背景に周囲の環境も写し込むことができます。

また、遠近の隅々までピントのあった風景写真もコンデジの得意とするところ。絞り優先モード（A）で絞りをできるだけ絞り込むようにしましょう。こんな時は手ブレ補正がついていれば、強い味方になってくれます。

夕焼け、雪景色、星空は、プロでも撮影の難しいシーンです。もし自分のコンデジにこれらのモードが備わっていたら、ぜひ挑戦してみましょう。

もし、今使っているデジカメでは満足できなくなって新しいデジカメを購入するとしたら、次のようなことに留意して選ぶと良いと思います。

① フィルムに相当する撮像素子（CCD）が大きいもの（1/1.8型か1/1.7型のもの）。

本当は画素数 600 万画素から 800 万画で十分なのですが、現在このクラスのカメラの画素数は 1000 万画素を超えてしまいました。

- ② マニュアル露出が可能なもの。
- ③ マニュアルフォーカスが可能なもの。

結局の所、最後はオートに頼らず自分で調節できるものが良いということになります。残念なことに、これが可能なモデルはフラグシップモデルといわれる一番高価なものになってしまいますが、画質や操作性などで不満に思うことは少ないと思います。

デジタル一眼レフカメラによる撮影

デジタル一眼レフカメラ（デジイチ）は、高性能でレンズ交換ができるので本格的な撮影に挑戦できます。デジイチの撮像素子は 35mm フィルムカメラにくらべて小さいので、画角がフィルムカメラの約 1.5 倍になり、接写でも、望遠でもより大きく写せるので有利です。初めて購入する場合には、一番お得な標準ズーム（18-50mm ぐらい）つきのセットを選ぶといいでしょう。このレンズは、フィルムカメラの画角なら 28-80mm に相当し、接写に強いものが多くある意味で万能レンズです。風景も草花の写真もだいたいこれ 1 本で間に合います。次のもう一本は 100mm 前後のマクロレンズをおすすめします。マクロレンズは等倍までの接写が可能で、純正品に限らずレンズメーカーのものも、甲乙つけがたい高性能なレンズがそろっています。ただ、草花が中心の時はマニュアルフォーカスへの切り替えが簡単にできるものが、昆虫など動くものが中心の時にはインナーフォーカスで超音波駆動のものがより適しています。

現在のデジイチで安心してレンズ交換ができるのは、フォーサーズマウントのカメラ（オリンパスとパナソニック製）だけです。それはレンズ交換したときに入り込んだゴミが、画面に映り込んでしまう危険があるからです。このゴミは接写するほど、また、絞り込むほど目立つので、遠景や望遠撮影するときはあまり気にならないのですが、接写で絞り込んで花や虫を撮ると画面に汚く映り込むのでやっかいです。この防塵対策がほぼ完璧なのはフォーサーズマウントのカメラですが、撮像素子が小さい関係でファインダーが小さく見にくいのであまりおすすめではありません。結局、レンズ交換を最小限にするよりないようです。

作 例



ミヤマアカネ



トノサマバツタ



オオカマキリ

これは超小型ビデオカメラ用の魚眼レンズを使って自作した特殊レンズ（通称虫の目レンズ）で虫の目線で撮影しました。コンデジでもこれに近い撮影ができます。

カワラノギク観察会といも煮会

顧問 中野 英男

10月14日(日)、鬼怒川の氏家大橋上流の東京大学実験サイトで、今年もカワラノギクの見学会を開催した。昨年に続き2回目である。参加したのは本会会員始め、東大保全生態学研究室、うしく里山の会・牛久自然観察の森の村中孝司先生、ガールスカウトの皆さん、国土交通省下館河川事務所の職員など約60名である。

今年は9月7日に関東地方を直撃した台風9号が、鬼怒川源流域に400mmを越す大雨をもたらし、氏家付近では約3mも水位が上昇したということであった。そのためカワラノギクの状況が心配されたが、実験サイトのカワラノギクは無事に紫の美しい花を咲き競わせており、一同ほっと胸をなで下ろしたのであった。ところが、サイトのすぐ西側は冠水したものの、シナダレスズメガヤは流されることなく、しっかり根付いていたことに改めてその驚異的な繁殖力を思い知らされたのであった。しかも、シナダレスズメガヤの周囲は砂が厚く堆積し、株の下流はむしろ小さな山脈のように砂が盛り上がっているのである。上流山間部の土留め工事で播種されたシナダレスズメガヤのしたたかさを立証しているようでもあった。

今年は7月14日の鬼怒川クリーン作戦当日にシナダレスズメガヤの抜き取り作業を実施した。9月23日にも予定していたのであるが、雨のために延期となり、この日、見学会に合わせ、抜き取り作業を実施した。分厚い砂のために作業は難航したが、増水にも流されずにミヤコグサやカワラノギクがけなげに咲いているのを見つけ、心和む一幕もあった。作業終了後、本会の松田喬副会長による写真パネルを使つての鬼怒川礫質河原特有の昆虫の解説が行われた。

河川敷で心地よい汗を流した後はミュージアム民家広場でのいも煮会会場へ。広場ではミュージアム友の会ボランティアグループを中心とする方々が、腕によりをかけたいも煮を用意して待っていてくれた。今年は本場山形風とか。中には山盛り3杯もお代わりする猛者(東大生?)もいるなど、皆さん秋の味覚を満喫していた。



シナダレスズメガヤと砂の堆積した様子



河原での昆虫解説会

第5回 定期総会と記念講演会の開催

事務局 小竹 弘則

創立5周年の定期総会と記念行事を6月3日（日）に開催しました。

午前中、会の発足以来ご指導をいただいている、NPO法人うしく里山の会・牛久自然観察の森の村中孝司先生をお招きして「鬼怒川河川敷植物観察会」を開催、午後、第5回の定期総会を行い、終了後に村中先生より「鬼怒川河川敷に自生する植物の保全」と題して講演を頂きました。

当日は天気も良く、午前の「鬼怒川河川敷植物観察会」では満開のミヤコグサを管理地内で観察、また、カワラノギクの実験サイトも見学しながら鬼怒川の河川敷の特徴や礫河原に独特の植物、植生が維持される仕組みについて詳しく説明して頂きました。

午後の総会では、昨年度事業の実績や、本年度の計画が無事承認され、引き続き行われた記念講演会では、スライドを見ながら村中先生にお話を頂きました。主題は①鬼怒川河川敷の植生の特徴 ②鬼怒川河川敷特有の植物 ③鬼怒川の自然に迫る脅威 についてで、詳細な調査データから示されるお話に圧倒されながら、日本国内でも唯一といいほど少なくなった礫河原の自然が鬼怒川にはまだ残されており、その自然の貴重さを改めて考えることになりました。

しかし、豊かな鬼怒川河川敷の自然も、僅かここ十数年の間で危機的な状況になってしまっていることも同時に知り、驚愕の思いでした。自然に親しむ会では会の発足以来、礫河原河川敷の体系を壊す元凶であるシナダレスズメガヤの除草に取り組んでいて成果が上がっていますが、この作業の重要度、必要性を改めて理解しました。この取り組みを長く続けることがいかに大切か、その責任の大きさも改めて考えました。

鬼怒川、そして河川敷の自然は私たちにとって本当に身近なものですが、それだけに大切に後世に伝え、鬼怒川の素晴らしさを広く発信できれば良いと思います。その中心がうじいえ自然に親しむ会ではないでしょうか。



村中先生とミヤコグサの見学



カワラノギク実験サイトの見学

